

絵画修復家のアトリエから

加賀優記子 絵画修復家

先月のコラムに続いて、珍しく2ヶ月連続で書かせていただく事になりました。スランプと言いつつもよく書くことがあるよねー、と編集の方に言われましたが、このたった1ヶ月の間にも、もう既にビッグニュース勃発なので、またまた新ネタが生まれてしまっているのですー！ 何を隠そうこのあたりに、文字通りニュースに出ちゃったんだもんね……と言っても、恥ずかしながら全然カッコ良くないの。修復や絵にはまったく関係の無いことのできたのでございます……。それでは何が起こったか、を、お話ししますね……。

先月、私が在住する藤沢市では、夜の1時過ぎにとんでもない誤報を一齐に市内に設置している緊急災害時用のスピー

カーから流してしまつたのです。その内容とは、「こちらは藤沢市長の〇〇です。只今、気象庁から東海大地震の発生警報が発令されました……」

ちょうど数日後に出発する旅行のバックパッキングをやっていた私は、サイレンが鳴つたのでオヤツと思ひ、窓を開けてこの言葉をはっきりと聞き取つてしまつた。で、こういう警報が出されて約数十分、数分以内に地震が来る、と聞いている。その短い時間に何が出来るか？と咄嗟に考えて行動できたのは、熟睡している子供をばつと抱きかかえて庭に出ることだけでした。しかし最近重たくなつてきた子供を長時間抱いて庭に立っている事なんて出来ないの、庭の隅に膨らませてあつた亀型のプールに子供を入れ、その上から私は覆い被さりま

した。プールの中にほんの少し残つていた水で背中が濡れて、びっくりして目を覚ませた子供が「え!? ママ、なにこれ、何でこんなところにいるの?」と叫ぶのを押さえ込み、こちらは今にも大地震がやってくるかという恐怖で（私は地震が一番苦手。）心臓が口から飛び出しそうにドキドキしているのを隠しながら、冷静に「今から地震がやってくるからおとなしくしてね、ママが守つてあげるから!」なんて言つていた……。

で、10分が経つた。タンクトップを着ていた私の背中や腕には蚊が一杯たかつていた。でも、それどころじゃあなかつた。何しろ家は築40年のボロ家。狭い庭では私達の上にももしかしたら家が倒れてくるかもしれない! 遠くにサイレンを鳴らして走り回っている数台のパトカーの音が聞こえる。緊迫した時間。近所の家も明かりをつけたり、窓を開けたり、外に出てきている人もいます。そしてまた10分が経つた。「おかしいな……」そうだ、この間に懐中電灯や貴重品を取りに行こう。私達の着替えも……。子供を外に残し、家の中に飛び込む。……そしてまた10分。おかし、本

当におかしい。ずぶ濡れで、やはり蚊に刺されまくつた子供を連れて家の中に戻つた。いくら身構えていても、何も起こらない。「?????」私は、立っていられないほど胃が緊張で痛むのに気が付いた。かつて美大受験で木炭を持つ手が震えた時よりもっと、手もふるふるしていた。大げさに聴こえるけど、でもやっぱり大地震のカウントダウンして体験してみると、かなり怖いものです。「あーもう、どうしたらいいのよー」と叫んだとたん、ピンポンピンポン、とまたメカホンからの放送が、夜空に響いた。「先程の、東海地震発生時の放送は、ペルー沖地震の津波警報の間違いです。」ピンポンパンパン、と暢気にそれだけ言つて、放送は終わった。

なんだとおおお!! すみませんっていうのも言わないのおお!! どーしてくれるのよ、私のこの体中の蚊の痕は! 極度の緊張でもう具合悪く死にそうよ! 津波が来るのはお昼間からNHKで言っていたから知っていた。大したことで無いと言っていたので、それについてと無いと言っていたのだ。信じられない、全然安心していたのだ。信じられない、それを大地震って言うなんて! その夜は一晚中蚊に刺されたかゆみと胃痛で眠れず、本当にさんざんだつた。……で、翌日、私のところに近所中の子どもを例の亀のプールで遊ばせている最中にテレビが取材に来た! 被害に遭つた市民の一人の声として、何か話せという。実は、私は2年前まで市役所に頼まれて藤沢市の美術館設立委員になつてた。自分は、市役所側の立場として、市役所のかたがたと一緒に会議に出ているのであつた。こうしてテレビに映つて何か発言するなんてことになる、私は市役所の敵になつてしまう事になる。だから、本当は、なるべく映して欲しくなかつた。しかも私は修復家として少しテレビに出たこともある。こんな形でテレビに映るのは少しまずい。でも、私は本当に頭にきていた。体中が蚊に食われたからじゃない。むしろ、ウチに起きたことなんて、大した事ではないと思つてた。私がとても腹が立つたのは、あの30分の間にどれだけの人被害に遭つたかと想像したからだ。中には老人ホームの、よろめく老人達もいた。たどろろし、瀕死の患者だつて、出産中の妊婦だつていたかも知れないじゃない? 私なんか取材しないで、ぜひ病院に行つて取材して欲しいとカメラクルーにずいぶん頼んだ。でもやっぱりウチの取材をしまつた。(おまけに私の家はあまりテレビを見ないので、去年の台風からテレビはアンテナが壊れて以来、放つちらかしにしてきたので、自分の映像なんて見れないのだ!) どうやら私はかなり目立つてTBSの「ニュース23」に映つたらしい。道理で放送のあつた翌日、私の携帯の着信履歴は凄かつた。私はその時間は、もうとっくに子供の添い寝で爆睡していたのだ……。

ホな問題がなんと多いことか。こんな誤報だつて、津波と地震のスイッチを押して間違えただけだという。ポタンの上にテブラで「つなみ」「じしん」って貼つておきなさいよ、と幼稚園児の母は思つた。柏崎の原発だつて予想を上回る震度のため原発が壊れる、と言つたつて、予想が上回る地震が来る予想をすれば良いのであつて、それともまあ、はつきりこれ以上の強度のあるものが作れないと白状した方が判りやすいし、そんな危なっかしいものを是非地震国日本に作らないで事故を予防して欲しい。

子供の頃、大人の世界がやつと理解出来始めた時に、なんと大人の世界ってテキトウなんだらうかつて思った。その感覚は、政治・行政の取り決めを見るにつけ驚天動地に至る。しかし、かく言う私もそんな日本の社会に生きていて、行き当たりばつたりな人類全体が、今や温暖化で瀕死の地球に乗つてきているんだ。もうひとつ付け加えてほしいことは、誤報で慌てふためいていた間、私は全く修復で預かっている作品たちのことを思い起こさなかつた。

アトリエは離れたビルにあることや、まあ、日頃地震が起きた時のために、絵を上から落ちてくる電燈や天井材などから守るためにコンクリート製の倉庫や木製の丈夫な櫓の中に入れていたので、これでだめならどこでもだめでしょうと半ば諦めの境地でいるのだけれど、原発の問題もなんだかこれと似ている。「これでだめならもうだめでしょう、」だなんて。しかし、申し訳ないけど絵と罪の無い人々の命と比べたら、やはり人命を取る訳で。原発の場合は、「これでダメなら、」なんていう考えになつてはいけなないのであつた!(モチロン、絵はないがしろにしても良いということでは無いですよ……?)

昔、大戦で、空襲時に貴重な巨匠の作品を多数移動させた、というような話を思い起こすけれど、すごい事だなあ、と本当に今は実感できます。ほんとうにね、マグニチュード8が来ても壊れない絵画倉庫や原発、テポドンが束になつて打ち込まれてきても大丈夫な建造物って造れないものかしらね。ああ、いつそのことそういう施設は全部免震で、ラーメン構造で、竹筒構造にしてしまえー!(なんてむちゃくちゃな) (つづく)

かがゆきこ●絵画修復家。大学卒業後、絵画の古典技法を学ぶためにパリに留学。ルーブル美術館の絵画修復員を経て、現在は舘沼で修復工房を主宰。